

# 『開かれたお寺』を考えるシンポジウム2009

…がんばれ仏教！…

平成 21(2009)年 12 月 18 日(金)

堅田 玄宥

## 一、はじめに

江戸末期まで、地域行政、教育から精神的な安心、楽しみへの開放までオールラウンドに担ってきた仏教寺院が、明治期以降、地域行政と教育は行政に、精神的なケアは病院に、芸事等の楽しみは劇場や放送サービスへと分離され、葬式・法事だけが残ってしまった結果、僧侶の実社会の生活レベルでの人々との繋がりが希薄になったと言われて久しい。

一方、20 世紀末のバブル崩壊以降、今日に至るまで、経済的不況が常態化し、今日では人間を使い捨て労働力としか見ない経済構造が定着しつつある。この間、年間3万人超の自殺者を生む日本社会となってしまった。これは、現日本社会の構造的課題である。

折しも、2009(平成 21)年 12 月 12 日 13 時～17 時まで、「がんばれ仏教！」で著名な文化人類学者上田紀行氏を迎えての「『開かれたお寺』を考えるシンポジウム2009」が赤野井別院で開催された。氏の基調講演、パネルディスカッションに耳を傾ける程に、生きがい喪失社会再生過程にこそ仏教再生の道も開かれているものと察することができた。

以下は、同氏による「基調講演」の概要(取意)と当日のアンケートへの回答である。

## 二、シンポジウム基調講演の趣旨

1980 年代後半以降のバブルの崩壊以降、日本において顕著になってきたものは“経済面の不況”ではなく、本質的には“生きる意味の喪失(生きがいの喪失)”であると窺える。今日、例えば小泉チルドレンに例示される如く人間の使い捨てが世の中に蔓延するようになり、20 歳代の若者の 50% が自らが使い捨てされているという被害意識を持っている。自らが誰からも支えられていないという意識が生きる意味を喪失させていることを意味する。これをうがてば、誰からも支えられていないという意識に囚われることが“精神的不自由”を来しているのだということが出来る。逆に、いざというとき駆け込める所があるという意識に目覚めさえすれば、人間は“自由になる”ことができるというのである。

このような時代にあって、仏教は、高邁な教義を説く前に、人々の苦悩の現実に関心を傾け、人々の支えになることができなくてはならない。僧侶は自ら仏教に救われた原体験を以て苦悩する相手に応えることができなくてはならない。お釈迦様の時代の仏教は一对一で人々の苦悩に相對していたはずだからだ。ドラマは、仏教は 21 世紀の妥当性を確保できなくては仏教それ自体も淘汰されるとご指摘である。お釈迦様の原点に立ち返れ

ば、仏教にはその力が秘められてあるのだから、人々の苦悩に立ち向かい、これに応える仕方を模索するところから始めることができなくてはならない。仏教は自己変革して国を支える気概を持って戴きたい。

ご門主は講師との対談の中で「浄土真宗の僧侶の法話は、ハンドル操作の法話に終わっており、叫びのようなエネルギーの籠った言葉を伝えるエンジンのご法話が出来ていない」と御覧になっているという。また「ご法話では、凡夫を捉えて、お恥ずかしい凡夫が仏に救われる説明で終わってしまっている」とおっしゃったともいう。

これを踏まえて、講師は、浄土真宗には自力アレルギーがあり“自力を恐れるあまり“苦悩する凡夫にできること”が説かれていないのではないか。僧侶のご法話では、叫びのようなエネルギーの籠った言葉を伝えることができなくてはならないと指摘された。

これに関連して、パネルディスカッションの中で講師から次の発言があった。**これは宗門人が真摯に受け止め肝に銘じて取り組むべき課題であると解される。**

「創価学会、立正佼成会、真如苑等の新興宗教は、新たな信者獲得、働きかけが熱心である。これに対して、伝統宗教の僧侶は、概して、ご法座の用意をお膳立てしなければお話ができない方が多い。僧侶は、場所を問わず機会を問わず、お話ができ、働きかけることができなくてはならない。」

因みに、講師は浄土真宗であるが、菩提寺の住職の印象として遺憾ながら、次のような印象をお持ちであった。講師の家には祖父が亡くなった時初めて仏壇が入り、お寺さんと繋がりができた。来訪するようになった菩提寺の住職は、法事に来ても、ひらすら経を読むのみで、**肝心のご法話は全くしない、短い言葉で事務的なやりとりをするのみでそそくさと帰って行く。人間には全く関わらない宗教者、宗教者としてのオーラも宗教心も全く感じられない宗教者。**この僧侶ではさすがに自分達夫婦は成仏できないと感じていて、死ぬまでには菩提寺を鞍替えしたいと著書に書いていらっかった(Ref「がんばれ仏教!」p26)。

とはいえ、今、日本全国には75,000のお寺がある。コンビニの2倍である。このお寺が元気になることが日本が元気になることに繋がる。だから、“がんばれ仏教”と言いつけたい。

最後に、具体的な事例紹介として、東京の曹洞宗の青松寺での「**仏教ルネッサンス塾**」と長野の臨済宗妙心寺派のお寺“神宮寺”の高橋卓志ご住職の取り組みが紹介された。

ビデオによる神宮寺様の紹介の概要は次の通りである。括弧内に著書「がんばれ仏教!」の中での記載箇所も示す。

神宮寺様には700軒規模の檀家があり、兼職を必要とする滋賀県のお寺の実情と開きがありすぎるものの、開かれたお寺としての積極的な取り組みは驚愕に値する。

ケアに転身し様々な取り組みをなさっている。

ア) お葬式の見本市(Ref「がんばれ仏教！」p143～)

イ) ケアレストランの運営

ウ) 「極楽クラブ」(月1回)の運営(Ref「がんばれ仏教！」p145～) ここでは、死を語ることはタブーとはせず、どこで死にたいか、誰に傍に居て貰いたいかな等を率直に文面化する。

生きている人間の苦悩と向き合っているタイ仏教のホーリン寺との交流

ア) 同国のエイズ患者を支援し、草木染の木綿で作務衣を縫製する作業所を運営し、出来上がった作務衣を日本で販売する(Ref「がんばれ仏教！」p49～)。

イ) ホスピス病院を運営し、患者が亡くなる時、仏教の言葉で励ます。

チェルノブイリの白血病の子供達を日本に招き信州大学で検診させ、檀家にホームステイさせて対処された。これに参画できた檀家は世界に貢献して誇りを抱くことができたという(Ref「がんばれ仏教！」p35～)。

### 三、パネルディスカッションの印象及びアンケートへの回答

パネルディスカッションの構想はよかったが、上田講師とのやり取りがやっとなり折角のパネリストお一人お一人にご意見を伺う時間的余裕が無かったのは残念であった。

しかしながら、直後の2009年12月15日に開催された教学伝道研究センター主催の「真宗の土徳」の講演、パネルディスカッションでは、演壇でのやり取りに終始するのみで、聴衆の質疑応答を許す余裕を顧慮していらっしやらない構成であったのと比べれば、今回の滋賀教区の研修は、遥かに聴衆への配慮が行き届いて良かったということができる。

講師への質疑内容は、以下のアンケートに含めて記載すると次のようになる。

Q1.「開かれたお寺」とはどんなお寺だと思いますか(自由回答)

A1.「開かれたお寺」というのは、僧侶・門信徒だけのお寺ではなく現代社会の役割を担うお寺であると考えます。「人々」には、未来の子や孫も含まれます。したがって、子や孫がお念仏を喜べる環境作りも我々の責務だということになります。

Q2.あなたの周りにあるお寺が「開かれたお寺」だと思いますか？

A2.ア.とてもそう思う、イ.どちらかといえばそう思う、ウ.わからない

エ.どちらかといえばそう思わない **オ.全くそう思わない。**

(備考)これには、自坊の評価は含めておりません。

**Q3. これからのお寺は開かれていくべきだと思いますか？**

A3. **ア.** とてもそう思う、イ. どちらかといえばそう思う、ウ. わからない  
エ. どちらかといえばそう思わない、オ. 全くそう思わない。

**Q4. 「そう思う」とお応えの方: どうすれば開かれていくと思いますか？ (自由回答)**

A4. 寺院は、葬式と法事への対応だけで法務は事足りりとしてはいけなと言われて久しいものがあります。

・住職は、お同行の声なき声に、仏教に救われた自身の切実な原体験をもとに生き生きとしたご法話でお応えすることができないといけなと申せます。僧侶の中には、どうかすると世間話をご法話であると誤解していらっしゃる向きがあることは悲しいことであります。

・寺院活動は、佛教壮年会・佛教婦人会の例会活動、日曜学校のような着実な営みが基礎になっていないといけな(必ずしも全部ができなくても)とすることができます。これには御門徒のご協力が欠かせません。毎月のご門徒様宅へのお速夜参りにお参りする都度「どうぞ仏壯・仏婦の例会にご参加ください」と一年を通してお願いをしてくれても、一向にこれにお応え戴けずご本堂に足を運んで戴けなことは悲しいことであります。また、日曜学校の営みは、年齢と共に取り組む範囲が広がった住職一人では継続が難しいので、ご門徒の若いお父さんお母さん方のご理解とご協力を仰ぎたいところであります。

・総代様方には、ご門徒の精神的指導層となって住職を助けて戴けると有り難いと常々念願しております。ところが、ともすれば、先頭に立つべき総代様方がお聴聞の現実体験を身を以て示されず名誉職に安住され、教区や組次元での研修活動を自坊での活動に先頭を切ってフィードバックして戴くご自覚が乏しい点を悲しく思うものであります。

この機会にご案内申し上げますが、寺報の記事の制作はどなた様にも開かれてありますので、四コマ漫画でも、地域や日常生活上のエピソードやフォト五七五でも何でもご遠慮なく投稿して戴き、広い年齢層のお同行の皆様方に親しんで戴けるよう、記事を豊かにして戴ければ幸いです。

**Q5. 「そう思わない」と応えた場合の質疑であり、場合に該当しないので割愛**

**Q6. 上田紀行先生の基調講演のご感想は？**

A6. 講演自体は、やや散漫でまとまりのない印象を受けました。これは初めての聴取者に対する講演であり大衆を引き付けたいという性格上、致し方がなかったかと窺えました。但し、当日は著者の著書が同時販売されており、サイン入りの同氏の「がんばれ仏教！」に目を通すことにより氏の意図は十分頂戴することができたと言えます。

質問に対しては、講師は背景をお持ちではないのでお応えは必ずしも的確ではなかったがこれも無理もないと言わざるをえません。なぜなら、講師は文化人類学の学者であって、浄土真宗のみ教えそのものに通曉せられているわけではない背景も顧慮しなくてはならなかったからです。

寧ろ、可能ならば、御門主に次のような質問をお届け戴けますと有り難いと存じます。

『御門主は、講師との対談で、「浄土真宗の僧侶は、自動車であればハンドル操作のような法話、即ちロジカルな情報を提供するような法話はできても、エネルギーの籠った言葉を伝えるエンジンに相当する部分の法話ができている」とおっしゃったと伺いました。

それならば、「エネルギーの籠った言葉を伝えるエンジンに相当する法話」とはどういうものを御門主はお考えになっていらっしゃるのかという疑念がわき起こりました。可能ならば、この機会にご門主にこの点についてお取り次ぎお尋ね戴ければ幸いに存じます。』

お尋ねするに当たり、まことに僭越ながら、私自身の窺うところを以下に示します。「浄土真宗は聞の宗教である」と云われております。しかし、聞く対象は、伝統的には仏願の生起本末を聞くと説明されているのではないのでしょうか。これは、いわば、お釈迦如来がお説き下さった阿弥陀如来のご本願のおいわれをお聞かせに与ることになるのであります。

お聴聞の習慣さえ確実であれば、そういう聞き方が悪いわけではないと考えられます。しかし、これはいわゆるハンドル操作に相当する説きぶりに係るものと考えられるのではないのでしょうか。

そうすると、エネルギーの籠ったエンジンに相当する言葉を頂戴するにはどうしたらよいのかということが問題となります。これについては、浄土真宗には、善導大師に始まり、法然聖人、親鸞聖人が詳細に示して戴きました六字釈の伝統があります。これは「阿弥陀如来のお喚び声を聞く」捉え方であります。

しかるに、「信心正因 称名報恩」の伝統に立つご常教は、「信心が先で念仏が後であり、念仏は報恩感謝の念仏に限る」お立場に立たれ、宗学院別科での指導や布教使研修の現場では、これに則した指導がなされており、六字釈に基づく「称即名」のダイナミックな信心獲得プロセスを捨象してしまっているのではないかと懸念するものであります。

これでは、折角のエネルギーの籠ったエンジンに相当する部分をお聞かせに与る仕方を宗門自ら阻害し閉じてしまっていることにはかならないのではないのでしょうか。

浄土真宗の僧侶のご法話がハンドル操作に終わり、エンジンに及ばない状態を招来せしめたものは、実は、ご常教にその原因があるのではないかと窺うものであります。

尚、当方の考え方の詳細は、Website正覚寺「<http://syohgakuji.web.fc2.com/>」

の門信徒会運動のみ教えに聞くに概要をまとめてみております。

詳細には弊誌「りびんぐらいぶず」に種々の角度から表現し掲げてもおります。

この機会にどうぞじっくり御覧になって戴き、もしやお感じになることがあれば、忌憚のないご指摘ご指導を賜ればまことに幸いです。

自らがお恥ずかしい存在であることでご法話が終っている点にどう対処するかについて  
ご開山聖人は、例えば、曇鸞讚(ご讚題)に「罪障功德の体となる」とお示してござい  
ます。これは、お恥ずかしい私の罪障が、阿弥陀如来の智慧の光に照らされることによって、  
功德に転ずるという有り難いお示しであります。

凡夫が本願力回向の名号のお救いによって信心を賜り、罪障を功德に転じて「勿体な  
い」と生かされる根拠がここに秘められていると窺うものであります。

これによって、お恥ずかしいと凡夫が自覚し、如来様のお救いに与ると説くだけではなく、  
自力アレルギーから解放され、自由になってそのお恥ずかしい凡夫が取り組むべき行動  
の方向性が既に明らかに示されるべきであると窺います。

Q7. パネルディスカッションのご感想は？ A7. (既述の為割愛)

Q8. その他、お気づきのことがあれば、忌憚なくお書きください。

A8. (本日のシンポジウムに対して)

私は組の相談員として組の連研を担っています。ところが、本日は、組の連研と日程が  
重なり、急遽、連研は他の世話方をお願いし、私はこちらに出向かせて戴いたものです。と  
ころが、寄せて戴きますと、寧ろ、連研の臨時カリキュラムとして組みこんでもよいような  
内容だったと窺いました。そこで教区の企画立案についてのお願いになるわけであります。  
今後は、せめてもう少し余裕を持って企画立案してもらえると有り難い。できれば年間計画、  
遅くとも半年前に決定してご案内戴けると有り難いと存じました。

(講師に対して)

「教えは過去のもの、人々の苦悩は現代のもの」に傾く表現があったかと存じますが、教  
えは過去のものではありません。阿弥陀如来は無量寿如来なのですから現に働きづめに  
働いていて下さいます。寧ろ原因は、教えを現代に生き生きとお伝えできていない僧侶に  
問題はあると思われませんが、ご講師にもその辺り、表現に気配りをして戴けると有り難いと  
存じました。

(著書に対して)

「がんばれ仏教」「生きる意味」「かけがえのない人間」「めざめよ仏教」すべて本日買い求め、拝見し始めております。拝見しつつなかなかのものと窺っております。今後、役立たせて戴くことが多いと存じます。

(開かれたお寺を実現するためには)

実はこの用語は基幹運動の門信徒会運動の合言葉であります。

しかるに、基幹運動の実情を拝見しますと、毎年度の取り組みのPDCAは、Pがあって、Dは予備的研修に傾き、Cは全くなく、Aは前年度のPを次年度のPに焼き直していると窺えます。まず、宗門内の方々には“PDCA”をご存じないのが一般的であります。これでは、不適合の現実を見極め、その原因を追究し、望ましい事態を明示して、その実現に取り組む目標進捗管理や是正処置はお釈迦様の明らかにされた“四聖諦”そのものなのですから、その精神が現実に生かされていないのはとても残念なことではないでしょうか。

また、運動は教区・組内では全寺院が一致団結して取り組むことができなくては大きな効果は期待できません。信じられないことのようにですが、宗門内の重鎮が地域に帰っては組内の一寺院の住職として汗水垂らして組の事業に参画なさるかというところではない事態が常態化しているのであります。

因みに、年度初めの組会では、組長をつるしあげ、執行部批判に忙しい割には、組の連続研修会には受講生を出さない、会所すら引き受けようとはしない。住職が共に学ぼうと云う研修会には一向に参画しない、等々が挙げられます。こうなるともはや非協力の域を超えて今や立派な組のお荷物であります。一方で、日頃は教務所長として遠方に赴任しているので、せめて組内の住職研修の事務局としてこの機会に日頃の御無礼をお詫びし一生懸命勤めさせて戴くといって尊いお姿をお見せになる方々もいらっしゃるのですから、このような姿は宗門組織人一般というよりは人によるのかもしれませんが。

しかしながら、不心得者が自ら姿勢を正すこともなく放置されたままでは、その組織は弱いと言わねばなりません。こうした事態を御本山当局は一体、どのようにお考えになっていらっしゃるのか、管理責任はどこにあるのでありましょや。この機会に、宗門人は、今一度新任の初心に立ち返り、まずは自らの姿勢を顧みてみようではありませんか。合掌

著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)

〒520-0501 大津市北小松四五二番地 ☎&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宥

URL: <http://syohgakuji.web.fc2.com/>

E-Mail: [mhkatata@pluto.dti.ne.jp](mailto:mhkatata@pluto.dti.ne.jp)